

1965年 統一劇場 >>>>>> 1990年 現代座 >>>> 2002年 NPO現代座 >>>>> 2026年 創立60周年

創立60周年記念公演

統一劇場 現代座 60年のあゆみ



北の海へ行ってまた働くよ

あゆみ

海で果てるよ

どうせ果てるなら



創立60周年記念公演

「出航」 2026年5月1日(金)～6日(水・祝) 開演 14:00

会場：現代座ホール

ご挨拶

本日はNPO現代座公演「出航」に脚をお運び頂きまして、まことにありがとうございます。

本作品は、昨年2月に上演したものの再演であり、このパンフレットにあるように1980年代に全国各地で公演したものを現代に生きる我々を通して作り直した作品となります。



約半世紀前の資料と記憶を頼りに稽古を始めた昨年の「出航」は、公演に辿り着くのがやっとで、すべての公演が終わった時には、もう嵐のように過ぎ去ったなという印象だった。

それでも、快さんの書く、人間に対する情愛をたまらないほど感じるこの作品の力は、作り手のみならず、観客も嵐の渦に巻き込んで、少なからず反響を呼んだ。

「出航」では当時の200海里漁業水域の設定により、壊滅的打撃を受けた北洋漁業の船員たちと、それを支え、港に生きる人たちが描かれる。登場人物たちの生活は、どこにでもあるような話で展開されていて、我々ほとんどの人間の暮らしぶりとそう変わらない。脚本を読んでも、特別なセリフがあるわけでもなく、大した事件が起こるわけでもない、ただ書いてあるのは身近にいて生活する人たちだ。そんな人びとの声に寄り添って、この脚本はある。だからこそ、共感したのだ。岡田さんの音楽に乗せて唄う出演者たちの声がいつしか劇場空間いっぱいになった時、作り手と観客の境界線は本当にわからなくなっていた。

今回、再演を迎えるにあたり、「出航」をどこにでもある話として捉え直し稽古場にいる。当たり前なことだが人間には仲間が必要で、支えあって生活をしている。私の横には誰かがいて、私を支えている。私の存在も少なからずそんなものだろう。そんな当たり前のことを考えさせてくれるのが演劇のいいところだ。登場人物のひとりひとりの横でただ一緒にいるようにしよう。皆さん、見終わったあと、誰かとこの作品について話してくれたら嬉しいです。

最後に、この1年の間に、照明の渋谷さんと俳優の黒さんが逝ってしまった。

前回の打ち上げで、酔った渋谷さんは作品づくりについて初めて私を褒めてくれた。黒さんはとても味のある老船長を演じて私の記憶から決して消えない。いなくなった時、両腕をもがれたような思いだったが、稽古場で2人の言葉が思い出され、まだここで一緒に作っているのだと思うようになった。2人は先輩で私は後輩だが仲間だった。

2026年4月

演出 八木澤賢

宝竜丸の乗組員たち



山田 清崇

船頭(漁労長)岩田



伊藤 嘉朗 (希望舞台)

船長



杉山 龍

局長



木の下 敬志

ボースン(甲板長)



八木 浩司

辰



永野 和宏

大月



廣瀬 正仁

藤村



山中 宏明 (劇団砦)

ダイ



町田 大征 (劇団昴)

タケ

ふじ食堂



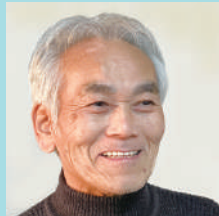
木下 美智子

女主人フジ子



江川 泰子 (劇団昴)

船主稀代



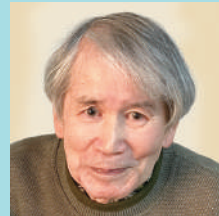
熊倉 正博

元船長吉村



今村 純二

元乗組員



渡辺 啓明

機関長



環 幸乃

フジ子の娘みどり



那由多 凜

元乗組員の妻玉枝



長谷川 葉月

ボースンの妻咲子



矢川 千尋

船長の恋人洋子



野田 詩 (MEME)

船頭の娘早苗

作 ■ 木村 快
 音楽 ■ 岡田 京子
 演出 ■ 八木澤 賢
 照明プラン ■ 渋谷 博史
 照明操作 ■ 木村 康恵
 音響 ■ 野中 正行 (響き工芸)
 衣装 ■ 有島 由生 (斧頭会)
 演出助手 ■ 青木 文太郎
 小道具 ■ 本田 典子
 写真撮影 ■ 山本 幸則
 制作 ■ 木下 美智子・東 志野香
 サポート ■ 丹波 梓
 今村 俣子
 現代座サポーターズ
 宣伝美術 ■ 東 志野香

【後 援】
 小金井市

 【協 力】(五十音順)
 株式会社オンリーワンダ
 希望舞台
 劇団昴
 劇団砦
 スタジオ・ポラーノ
 ハトノス
 響き工芸
 斧頭会
 BONBON組
 MEME

【特別協力】
 焼津漁業協同組合
 一般社団法人焼津市観光協会
 焼津まぐろ漁業株式会社
 山城 和磨
 有限会社マルイチ西條水産

*現在では穏当を欠くと思われる表現
 がありますが初演当時の時代を反映
 した世界観を表現するものとして尊
 重しそのまま使用しています。

『出航』によせて

木村 快

魚のとれなくなった、いわば展望のない海へ船出して行く一団の漁師たちがいる。それがなぜか悲壮でなく、むしろウキウキした陽気な気分をただよわせているのだ。男たちだけではない。見送る家族や関係者も手を振って送っている。

海からの風に歯をガチガチふるわせながら、ふっとわたしの脳裡に、そんなありうるはずのない光景がかすめた。



これは、1975年に石巻港に停泊している漁船団を目撃したときのことである。この時、日本の遠洋漁業は各国二百海里漁業禁止条約などで深刻な打撃を受け、崩壊しつつあった。ぼくは1970年以前から北海道函館を中心に遠洋漁業の調査をしていたから、まだ生き残っている船があることに目を見張った。

1970年には取材のために函館ドック造船所の臨時工として失業漁船員たちと一緒に働いたこともある。遠洋漁業は大変特殊な職業で、漁船員たちは一般社会とは全く切り離された時間と空間で生きていたから、他の職業に転職することは簡単ではなかった。石巻のあの船団だと百人前後の漁師が働いているはずである。いったい彼らはこれからどんな道を辿るのだろうか。

身動きもせずたたずんでいる船団を見つめながら、なぜかぼくは『北の海へ行ってまた働くよ』という詩を書いていた。それはぼくら自身が失業者集団から始まった劇団だったからだろう。この詩が1981年の上演作品「出航」の骨格となった。

あれからもう五十年も経った。あの時は漁業界の問題として見ていたけれど、今思うと、実は人類の直面する将来を暗示していたのだ。

あの時の漁業界は石油価格が安く、エレクトロニクス技術による漁法の進歩、そして鋼鉄船の大量生産が



進み、世界に誇る大漁業国として名をはせていた。しかし、ドルショック、オイルショック、そして各国沿岸二百海里規制と追い打ちをかけられ、船主たちは多額な負債を抱えたまま身動きできなくなり、廃業廃船

が進んでいた。

振り返って現代はどうか。それぞれが便利なスマートフォンで自分だけの世界を作り、犯罪を複雑化させ、政治状況を混乱させている。

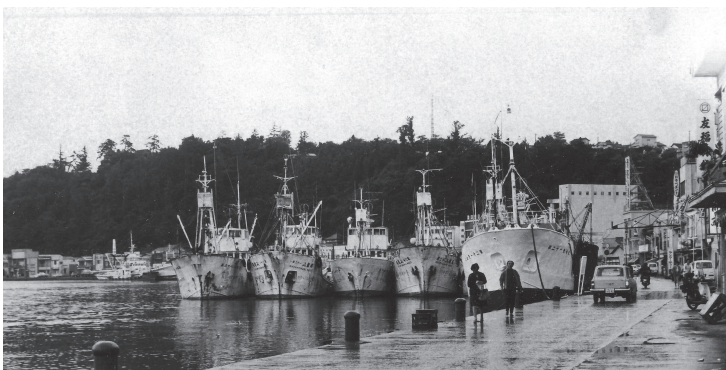
便利な社会を求めて地球温暖化を進め、その結果、災害が連発すると、もう引き返すことは出来ないのだと叫んでいる。そしてやむことのない国同士の殺し合い…………。

人間は自然に適応した生き方を捨て、目先の便利さにはばかり目を向けてきた。そのため便利な世の中になればなるほど生命力を低下させるというきわめて矛盾に満ちた状況に立たされているのだ。

魚のとれなくなった海に出かけて行くことは、漁師にとっては辛いことだが、それでも彼らが「自分は海でしか生きられない」と思っていることに、わたしは救いを感じる。そこでしか生きられない人間だけが、自らを強くし、自然との共存の道を見出すだろう。

いったんは海から逃げ出そうとした漁師たちが、結局はよくても悪くても自分の生きる場所は海であることを知って、ふたたび海にいどむ姿をわたしは見たいと思った。その船出はきっと悲壮なものではなく、共通の運命を自覚することによって、孤立から脱却し、かつてはおびえた海に、生きるためのあらたな戦いをいどむ新しいロマンが息づいているはずだ。

人間は連帯することによってもっと強くなれる。そして自然と共存する道を見つけ出すだろう。わたしはそう思いたい。わたし自身のために、わたしにつながる仲間や、仲間の子供たちのために。



◀この写真は東日本大震災以前の1975年。たまたま石巻港に停泊中の漁船団。休暇のため年に1度は母港へ帰港するらしいが、こうした船で1年も2年も魚を求めて世界の海を航海するという遠洋漁船団の姿である。

「出航」再演に思う

今村 純二

昨年2月に続き、また「出航」再演の機会が巡ってきた。ありがたいことだ。

「出航」を思う時、私の胸に59年前のある記憶がいつもよみがえる。統一劇場二年目のその時、私は北海道40日の旅公演で巡演していたのだが、ある日、日高地方の小さな漁村で十数人の漁師たちに出逢った。

明け方の番屋で、一仕事終えた彼らが生き生きと唄って聞かせてくれたニシン漁の歌。これが三石町の「沖揚げ音頭」だった。

「沖揚げ音頭」とは一つの歌のことではなく、「オーシコー」「網起こし唄」「ソーラン節」と、ニシン漁一連の作業に伴って歌われる作業歌のことで、まるで構成劇が展開されているような感動を覚えたものだった。

それから14年後の1981年、統一劇場は破たん寸前の大きな岐路に立たされていた。その時、まるで自分たちの人生を漁師たちの生きざまに重ね合わせたような「出航」の舞台が生まれたのだ。舞台は成功し、揺れていた私たちは、「出航」に励まされてまたこの道を歩みはじめたのだった。そして再演された1989年も、厳しい時代だったが「出航」で乗り切ることが出来た。

芝居のクライマックスではこの三石の「沖揚げ音頭」が登場する。若かつ

2025年2月1日(土)～9日(日)

「出航」の舞台より



た私たち統一劇場の俳優たちは、この「沖揚げ音頭」を力いっぱい歌い、漁師になり切った気分で芝居を演じたものだ。そうして力をもらった私たちは再び立ち上がり、劇団の危機を乗り越えた。あの時の、三石の「沖揚げ音頭」が、こうして思いがけない形で陽の目を見たのだ。

こうしてみると、危機をいつも救ってくれた「出航」の舞台には、なにか不思議な力があるのだと思えて仕方がない。初演以来ボースンを演じてきた私は、昨年の再演では「船頭」役に挑戦したのだが、あの「出航」が、なんと、今どきの若者達の手でしっかりこの時代に甦ったことに驚かされた。これは全く奇跡のようなものではないか。

60年たって「NPO 現代座」となった今、劇団を次の世代に引き継いでいく時が来たのだと実感している。今日の「出航」の舞台を創り上げた若い仲間が、宝竜丸の漁師たちからパワーをもらってたくましく生き抜いて欲しいとも思うし、さらに、人々を励ます演劇づくりを引き継いでくれたら、これ以上の幸せはない、と思っている。

「第十六宝竜丸万歳！！」



60年のあゆみ

1965年

*数字は上演回数

3月 日比谷公会堂で旗揚げ公演

「夜明けの歌ごえよ響け」 構成・演出：木村快 16回
 「働く者のバラエティ」 構成・演出：木村快 58回

10月 木村快、中国を訪問

11月 本部を八王子市高尾より小金井に移転

1966年

「みんな手をかせ腕をくめ！」 作：木村快 117回
 「肩組もう仲間たち」 構成・演出：木村快 91回
 「雑草のうた」 作：木村快 30回

1967年

「雑草のうた」 作：木村快 194回

1968年

3月 第一次稽古場落成

「おふくろさんこんにちは」 作：木村快 138回
 「青年アンサンブル」 構成・演出：清水義方 76回

1969年

「おふくろさんこんにちは」 作：木村快 142回
 青年アンサンブル 構成・演出：清水義方 95回

1970年

「マリコのうた」 作：木村快 66回
 「希望」 作：木村快 33回



「希望」

1971年

「希望」 作：木村快 148回

1972年

「希望」 作：木村快 129回
 「オモチャの青春」 作：石塚克彦 75回

1973年

「希望」 作：木村快 77回
 「オモチャの青春」 作：石塚克彦 66回
 「今日もどこかで」 作：木村快 62回

11月 第2次本部稽古場落成

1974年

「今日もどこかで」 作：木村快 117回
 「希望」 作：木村快 54回
 「ふるさと」 作：石塚克彦 63回

1975年

「今日もどこかで」 作：木村快 177回
 「ふるさと」 作：石塚克彦 152回

7月 松竹映画、山田洋次監督「同胞」の撮影に協力

1976年

「ふるさと」 作：石塚克彦 158回
 「帰郷」 作：木村快 50回

1977年

「帰郷」 作：木村快 238回
 「ゆうれいよ自分の足で立て」 作：木村快 18回

1978年

1月 五反田・希望ホール開設

希望ホールで9作品上演
 「おっ母さん」 作：石塚克彦 159回
 「港で拾った花」 作：木村快 49回

1979年

「結婚」 原作：山田洋次 脚本・演出：木村快 32回
 「おっ母さん」 作：石塚克彦 82回
 希望ホールで7作品上演



「結婚」

1980年

「結婚」 原作：山田洋次 脚本・演出：木村快 102回
 「兄んちゃん」 作：石塚克彦 116回
 希望ホールで6作品上演

1981年

「出航」作：木村快 80回

「兄んちゃん」作：石塚克彦 116回

希望ホールで7作品上演

木村快 劇団「青芸」で「ターミナル」を作・演出

1982年

「出航」作：木村快 155回

「兄んちゃん」作：石塚克彦 64回

木村快 劇団「青芸」で「あかばな一の島」を作・演出

1983年

「グループ出航」「ふるさときゃらばん」「希望舞台」の3ユニット活動始まる

グループ出航 「出航」作：木村快 34回

グループ出航 「遙かなる島」作：木村快 22回

グループ出航 人形劇チーム「花かご」活動開始

ふるさときゃらばん 「親父と嫁さん」作：石塚克彦 111回

希望舞台 「幸福」作：朝間義隆 60回

10月 五反田・希望ホール閉鎖

1984年

グループ出航 「遙かなる島」作：木村快 59回

ふるさときゃらばん 「親父と嫁さん」作：石塚克彦 113回

希望舞台 「幸福」作：朝間義隆 29回

1985年

「ふるさときゃらばん」「希望舞台」独立

「遙かなる島」作：木村快 45回

「カンナ咲く島」作：木村快 23回

1986年

「カンナ咲く島」作：木村快 82回

1987年

「遙かなる島」作：木村快 93回



「遙かなる島」

1988年

「風は故郷へ」作：木村快 44回

「星と波と風と」作：木村快 41回



「星と波と風と」

1989年

「出航」作：木村快 56回

「星と波と風と」作：木村快 45回

1990年

8月 劇団名を「現代座」に改称

「風は故郷へ」作：木村快 70回

「星と波と風と」作：木村快 50回

「もくれんのうた」作：木村快 12回



「もくれんのうた」

1991年

「風は故郷へ」作：木村快 44回

「星と波と風と」作：木村快 55回

「もくれんのうた」作：木村快 7回

1992年

「もくれんのうた」作：木村快 24回

「朝の風に吹かれて」作：木村快 80回

1993年

「もくれんのうた」作：木村快 41回

「朝の風に吹かれて」作：木村快 50回

1994年

「朝の風に吹かれて」作：木村快 50回

木村快 「オフィス島」企画「熱い風」作・演出

「もくれんのうた」ブラジル公演 作：木村快 17回

「ニッポン人諸君！」作：木村快 9回

1995年

木村快 全日本民医連の依頼で阪神淡路大震災の医療記録

「不眠の震災病棟」執筆

「もくれんのうた」作：木村快 5回

「ニッポン人諸君！」作：木村快 57回

木村快 ブラジル取材開始、この年から毎年ブラジルを訪問

1996年

「絆をつくる街」作：木村快 13回

1997年

「絆をつくる街」作：木村快 55回

3月 木村快 アトラス企画・江見俊太郎主演「蒼い空」
を作・演出

1998年

「絆をつくる街」作：木村快 5回

木村快 ブラジル「ありあんさ通信」発行開始

「虹の立つ海」作：木村快 9回

1999年

「虹の立つ海」作：木村快 33回

2000年

「虹の立つ海 未来からのうたごえ」作：木村快 36回

2001年

「虹の立つ海 未来からのうたごえ」作：木村快 23回

赤平市民ミュージカル「虹に向かって」協力

2002年

特定非営利活動法人 NPO現代座を設立

「虹の立つ海 未来からのうたごえ」作：木村快 24回

2003年

「虹の立つ海 未来からのうたごえ」作：木村快 26回

2004年

「虹の立つ海 未来からのうたごえ」作：木村快 16回

語り「遠い空の下の故郷～ハンセン病療養所に生きて」公演開始 作：木村快

「約束の水」作：木村快 11回

2005年

みんなで壁を壊して3F小ホールをつくる

語り「小金井小次郎」作：木村快 3回

「約束の水」作：木村快 10回

「ユーモレスク」作：木村快 3回

2006年

「約束の水」作：木村快 13回

「ユーモレスク」作：木村快 3回

「小さなカフェで」作：木村快 6回

2007年

「約束の水」作：木村快 8回

「小さなカフェで」作：木村快 2回

「熱い風」作：木村快 5回

2008年

「約束の水」作：木村快 13回

「わすれものはありますか？」作：武本英之 4回

「もくれんのうた」作：木村快 6回

2009年

「約束の水」作：木村快 3回

「わすれものはありますか？」作：武本英之 6回

「もくれんのうた」作：木村快 6回

2010年

「わすれものはありますか？」作：武本英之 3回

「ここは幸せゼロ番地」作：武本英之 6回

語り「小金井小次郎」 3回

2011年

「ここは幸せゼロ番地」作：武本英之 4回

「ユーモレスク」作：木村快 7回

「蒼い空・友の呼ぶ声」作：木村快 5回



「ユーモレスク」

2012年

「蒼い空・友の呼ぶ声」作：木村快 13回

「ユーモレスク」作：木村快 5回

2013年

「蒼い空・友の呼ぶ声」作：木村快 3回

「出会いの街」作：木村快 9回

木村快 同時代社より「共生の大地アリアンサ」出版

2014年

合唱構成劇「武蔵野の歌が聞こえる」作：木村快 9回

「約束の水」作：木村快 10回



「武蔵野の歌が聞こえる」



「約束の水」

2015年

合唱構成劇「武蔵野の歌が聞こえる」作：木村快 8回

「誰でもできる朗読教室」スタート

2016年

合唱構成劇「武蔵野の歌が聞こえる」作：木村快 8回

バラエティ劇場「小金井小次郎」他 3回

2017年

合唱構成劇「武蔵野の歌が聞こえる」作：木村快 3回

2018年

新春バラエティ劇場 3回

2020年

バラエティ劇場「群来」他 3回

2021年

「風は故郷へ」作：木村快 3回



「風は故郷へ」

2022年

「プリンギン・ホテルにて」作：木村快 5回



「プリンギン・ホテルにて」

2023年

新版「武蔵野の歌が聞こえる」脚色・演出：八木澤賢 6回

「わすれものはありますか？」作：武本英之 6回



「わすれものは
ありますか？」

2024年

語り芝居「武蔵野の歌が聞こえる」作：木村快 1回

2025年

「出航」作：木村快 演出：八木澤賢 8回

語り芝居「武蔵野の歌が聞こえる」作：木村快 4回

2026年

「出航」作：木村快 演出：八木澤賢 6回

主な上演作品

「みんな手をかせ腕をくめ！」 ――― (1966年)

演出：木村快 音楽・コント：出演者による集団創作

統一劇場創立1周年記念公演。小編成のアンサンブルの様子や自分たちの生活そのものを脚色したドラマなど、三十数名が若さを思いきりぶつけた歌舞構成は、頼りない若者の集団への現実的な同情や不安もありながら、エネルギーに未来への期待を感じさせるものだった。全国主要都市で上演され、統一劇場の門出のキャンペーンとなった。



「雑草のうた」 ――― (1966~67年)

作：木村快 音楽：岡田京子

最初の創作劇作品。町工場の若者たちが花見から帰ってくると、社長は蒸発、会社は倒産。取り残された若者たちはそこで寝泊まりし始めるが、今度は暴力団が債権者の代理として追い出しにかかる。そんな中、若者たちはびくびくしながら力を合わせて、自分たちの生き方を探し求めていく――。なにか当時の統一劇場の状況にも似た物語であった。

「おふくろさんこんにちは」 ――― (1968~69年)

作：木村快 音楽：岡田京子

田舎に住む母親が離れて暮らす息子を心配して都会へやってくる。そこで巻き起こるちぐはぐな事件を通し、息子と母親の心のズレや通い合いを描いた作品。農村部まで活動範囲を広げ、後に続く「劇場づくり」への足掛かりとなった。この作品を機に、劇場に集まる人にいかに楽しんでもらうかということに舞台制作のウエイトを移していった。



ミュージカル「マリコのうた」 ――― (1970年)

地上は今や交通戦争たけなわ、天国は満員で、定員はあとわずか2名となる。天使長の秘書マリコはひたすら地上からやってくるはずの恋人、正一を待つが、3人連れでのんきにやってきた正一はこともあろうに新しい恋人を連れてきた。愛情とは何か……。モータリゼーション時代を風刺する、とぼけたミュージカル・コメディ。

「希望」 (1970~74年)

作：木村快 音楽：岡田京子

中学を出るとき学校の先生が言った。「お前たちは働くことで世の中を動かす、希望を創る人間だ」と。金の卵とおだてられ、高度成長の尖兵として都会の工場に就職した青年たちは泥沼のような現実の中で絶望し傷つきながらも、自分たちの「希望」を作り出していく。統一劇場の活動を本格的に確立した記念碑的作品。



「オモチャの青春」 (1972~73年)

作：石塚克彦 音楽：岡田京子

オモチャ工場で働く若者たちにはそれぞれ夢があった。グズラは故郷に錦を飾りたい。ヨッ子はオシャレに遊ぶ青春に憧れ、比呂子は理性的に生きようとする。たとえ現実の壁が立ちただかろうとも、若者の胸の奥底からあふれる生命の燃焼は、誰も押しとどめることが出来ない。青年の生命力への共感を込めた、ミュージカル形式のコメディ。

「今日もどこかで」 (1973~75年)

作・演出：木村快 音楽：安達元彦

昔気質の頑固者・徹造は、男手で3人の子供を育ててきたが、子供たちはことごとく徹造の意に反して独自の生き方を選ぶ。そしてある日、隣に住む徳一とその息子も交えて大きな親子げんかが起こってしまう。それぞれが自分の生き方を模索し、新しい人間の絆を求めている。激しく変わろうとしている時代に、何が心をつなぐ本当の絆となるのだろうか――。



「ふるさと」 (1974~76年)

作・演出：石塚克彦 音楽：岡田京子

日本中の農村地帯がそうであったように、物語の舞台・ひぐれ村も開発が進み、村人たちは畑を売って村を離れていく。激しく変わりゆく現代の中で、それぞれが一獲千金をもくろみ、あるいは純粋な青春を求め、土への愛着と新しい生活への期待とに悩み、怒りや悲しみ、笑いを生み出していく。そして最後の祭囃子は、そんな村人ひとりひとりの想いをのせて、哀しく、楽しく、ひょうきんに野づらを流れてゆくのである。

主な上演作品

「帰郷」 (1976~78年)

作：多賀為二(木村快)、清水義方 演出：清水義方、木村快 音楽：安達元彦
母を心配して15年ぶりにブラジルから帰ってきた準之助の故郷は、平凡な農村から一面の大住宅地に変っていた。唯一の慰めは、姪夫婦が花の栽培をしていることだったのだが、その土地も住宅造成の候補地となっており……。金か、畑か、人の愛か、残された土地をめぐる騒動を通して、「列島改造ニッポン」の現実を見つめる喜劇。

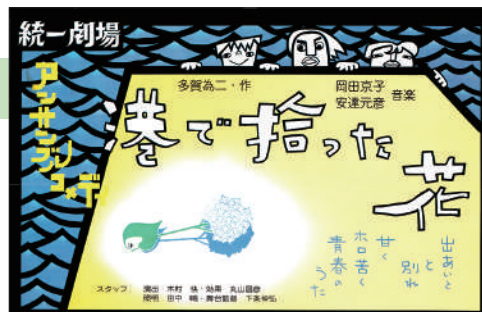


「おっ母さん」 (1978~79年)

作：石塚克彦 音楽：寺本建雄
どこにでもある、何の変哲もない町、そんな町に誇りと生きがいを作ろうと、ナマズの養殖を始めた人がいた。古来よりナマズは地震の源だといひ、町はてんやわんやの大騒ぎ。15曲のナンバーで繰り広げる痛快な日本のミュージカル。

合唱ミュージカル「港で拾った花」 (1978年)

作・演出：多賀為二(木村快) 音楽：安達元彦、岡田京子
1970年代後半、高度経済成長のシンボルと謳われた青函トンネルの開通が迫る一方、青函連絡船や北洋漁業は消えゆく運命にあった。そんな変わりゆく時代の函館を舞台に、北洋航海から港に戻った3人と所持金を奪われ途方に暮れる娘の青春群像を描く。甘くほろ苦い、青春の歌とコーラスとドラマが溶け合うさわやかな舞台。



「結婚」 (1979~80年)

原作：山田洋次 脚本・演出：木村快 音楽：岡田京子
格式ある教師の家庭に育った節子は、親の勧める相手との結婚式の前日に、この結婚は間違いだと言いだした。一家は大混乱に陥るも、温かく見守る祖母や隣家のおばさんに支えられながら、節子は再起を目指す。山田洋次監督が統一劇場のために準備した原作を、「男はつらいよ」のシナリオ・美術・衣装小道具チームと共同で制作した。

「カナナ咲く島」 ————— (1979~80年、1985年、1986年)

作：木村快 音楽：岡田京子

少女カナナは、ふとしたことから自分が母の本当の娘ではないことを知り人知れず悩んでいた。ある日診療所の医師が口ずさむ歌を聞いたことから遠い過去の記憶が呼び覚まされ、自分の生い立ちに様々な人がかわり、見守ってくれていたことを知る。人間の絆とは何か。黒潮に洗われる小さな島を背景に、1人の少女と医師の心の交流を描く。



「マリリン島にて」 ————— (1980年、1983年)

作・演出：木村快 音楽：岡田京子

一億総観光旅行時代。南太平洋の小さな島に、船を乗り間違えた日本人女性の一団がやってきて、てんやわんやの大騒ぎ。島の事務所で働くナンシーは日本にあこがれていたが、観光客の余りに自分本位の姿に呆れ、日本人に幻滅する。しかしやがて彼女たちとの交流を通して、それが人間の弱さや哀しさの裏返しであることを理解するようになる。

「兄ちゃん」 ————— (1980~82年)

作：石塚克彦 音楽：寺本建雄

日影町の北西にそびえるカラマツ山、その中腹にある開拓部落に暮らす花立千吉と、その3人の子供の物語。長男、長女、次男の3人はそれぞれ父親と対立し、まさに家族は分解寸前。千吉が癌にかかっていることを聞いた3人はそれぞれに親孝行をしようとするも、それさえも悪い方へと進んでいき……。



「出航」 ————— (1981~83年、1989年、2025年、2026年)

作・演出：木村快 音楽：岡田京子

一旦は海に見切りをつけ、陸の職業へ転身を図った漁師たちだが、海を離れ、仲間と別れる辛さを思い知らされる。解散式の日、みんなで海の歌を歌い踊るうちに、孤立に怯えながら逃げ回るよりも仲間と運命を共にする道を選ぼうとする。200海里問題を通して、現代が直面している問題を見据えながら人間の在り方を問いかけた作品。

主な上演作品

希望ホールで上演した主な木村快作品	
「ブーゲンビリアの咲く街で」1978年	「海辺の公園」1979年
「雨上がり」1978年	「ハッピーガール」1979年
「幼なじみ」1978年	「多恵の青春」1981年
「ロッキンチェアのおじさん」1979年	

「遙かなる島」 —— (1983~87年)

作：木村快 音楽：岡田京子

その島は、遠く太平洋のかなたに置き去りにされたような人口200人に満たない島である。国の援助で公共事業が始まり、島は活気づくが、ある夏の初め、長雨により開通したばかりの道路は押し流されてしまった。村人たちは自然を無視した近代化のもろさを痛感し、そしてその絶望的な状況は、村人たちの間に新しい連帯を生みつつあった。



「風は故郷へ」 —— (1988~91年、2021年)

作・演出：木村快 音楽：岡田京子

戦争や開拓といった国策にひたすら従い続けた男たちが直面したのは、国の農業政策の大転換で開拓地を追われるという事態だった。子供たちは街へ出て暮らすよう勤めるが、老人たちは人生最後の抵抗に立ちあがる。幻想に絶望した時に発見される新たな世界、それを通して見えてくる人間の暮らしの本質を問いかける作品。

2021年にはコロナ禍の社会情勢の中で再演し、客席との間にビニールシートを設置するなど工夫をしながら歌声を届けた。



「星と波と風と」 —— (1988~91年)

作：木村快 演出：清水義方 音楽：岡田京子

バブル絶頂期、ミクロネシアに観光に来た若者たちは、そこがかつて日本の統治領であったことを知る。楽園のような場所に存在する過去と現在の厳しさを通して、本当の国際化とは何かを語りかける、若者たちのミュージカルコメディ。東京の朝日生命ホールでの千秋楽には、伝統的な生活を固守するヤップ島のケニメデ大酋長を招待した。



「もくれんのうた」 —— (1990~95年、2008年)

作：木村快 音楽：岡田京子

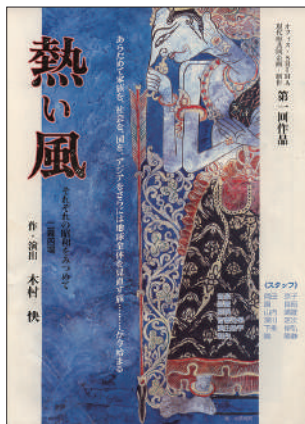
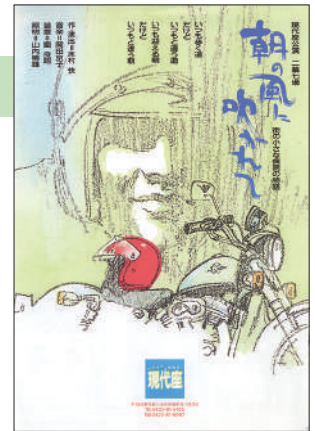
日本のエネルギーが石炭から石油へ転換した時代、炭鉱で働いていた健太郎は離職者対策でブラジルへ渡った。母の墓参りのために30年ぶりで帰国した日本だったが、そこは健太郎にとって見知らぬ異郷だった——。

国内各地での上演に加え、1994年にブラジル日系社会から招聘、ブラジル13都市で上演した。

「朝の風に吹かれて」 —— (1992～94年)

作・演出：木村快 音楽：岡田京子

朝日病院は小さな病院だが、院長の理想と人柄が良心的な医療スタッフを集め、地域に根差した病院として信頼を集めていた。しかし、院長が亡くなると経営は行き詰まり、スタッフのまとまりも崩れ始める。そんなある日、地域の当番病院では手に負えない重症患者が運び込まれ、一晩中、病院中が手術の成否を見守ることとなる――。



「熱い風」 —— (1994年)

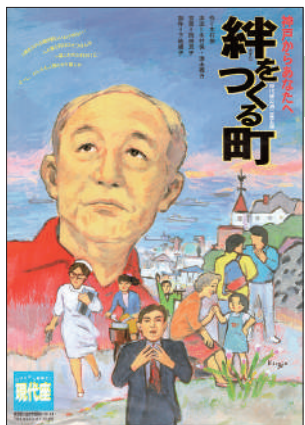
作・演出：木村快 音楽：岡田京子

日本の歴史から忘れられたインドネシア残留日本兵の目を通して、戦争を知らない青年海外協力隊員、ODA 事業を進める商社マンといった、海外に進出する日本社会のありようを見つめた作品。

「ニッポン人諸君！」 —— (1994～95年)

作：木村快 音楽：安達元彦

青年海外協力隊の一員としてインドネシア奥地にやってきた信子は、異文化社会に馴染めず憂鬱な日々を送っている。そこに現れた身勝手な日本人・太田老人の行動をきっかけに、信子は今まで見てこなかった「ニッポン」を見る――。アジアの中の日本、21世紀の日本人像を描くさわやかコメディ。



「絆をつくる町」 —— (1996～98年)

作：木村快 音楽：岡田京子

1995年の阪神淡路大震災を受けて現代座劇団員が神戸で3ヶ月間ボランティア活動に従事し、その時の経験をもとに制作された作品。舞台は震災から1年半たった1996年の夏。震災直後は地域の絆で苦境を乗り越えた青葉地区の人びとも、避難生活が長引くなかでつながりが断ち切られていく。復興から取り残されながらも前を向く高齢者たちたちの姿を描く。

主な上演作品

「虹の立つ海」 (1998～2004年)

作・演出：木村快 音楽：安達元彦

地震が起こり、老人と息子夫婦は洞窟に避難するが、洞窟を抜けるとそこは50年後の環境が破壊された世界だった。町は消え失せ、人々は食糧の欠乏と、病いに苦しんでいたが、1人の少女が人々のための薬草を探していた。諫早干潟救済問題を背景にした現代のメルヘン。NPO 現代座としての最初の作品となった。



語り「遠い空の下のご郷～ハンセン病療養所に生きて」 (2004～25年)

作：木村快

ハンセン病であるために強制的に隔離された女性の半生を、歌と朗読で描いた作品。元ハンセン病患者との交流を重ね、差別に気づかず過ごしてきた自分自身を思い返すことが大切と痛感しながら、現代座としてできる取り組みとして企画された。劇場だけでなく、お寺や学校など様々な場所での公演を現在も重ねている。

「約束の水」 (2004～09年、2014年)

作：木村快 音楽：岡田京子

日系ブラジル人のミツコは、祖母から「日本は山や森や水に囲まれて暮らす国」と聞いて育った。その祖母が、故郷の村の「約束の水」という湧水を恋しがりながら息を引き取り、ミツコは意を決して日本を訪れる。祖母の故郷はもう山間地の無人地区となっており、かつて祖母から聞いた風景はそこにはなかった――。



語り「小金井小次郎」 (2010年)

作 木村快

幕末から明治にかけての激動期の歴史を背景に、流罪人でありながら三宅島島民のために資材を投じて貯水施設を建設した小金井小次郎を扱った、郷土ゆかりの朗読作品。現代風の朗読だけでなく、和楽器演奏者による浄瑠璃三味線と伝統様式の朗読も交え、現代的視点から歴史を見直す複合的な語り作品に仕上がった。

「ユーモレスク」 (2005年、2006年、2011年、2012年)

作：木村快

木村快の指導の下で演劇づくりの勉強をする若手演劇人を中心に立ち上げた「実験劇場・ユーモレスク」企画の第1弾。現代座会館3階の「小さなNPO劇場」にふさわしい作品作りを目指し、会場を喫茶店のような雰囲気にするなど工夫した。とある喫茶店を舞台にした、「ユーモレスク」という有名なSPレコードにまつわるお話。



「小さなカフェで」 (2006年、2007年)

作・演出：木村快

町中を走り回るタクシードライバーは実に多くの人々の喜びや悲しみと出会う。ある日、小さなカフェで、街おこしNPOの若者たちとタクシードライバーの間に、思いがけない形で心の交流が始まる。3階小ホール用に創った作品の第2弾。

「わすれものはありますか？」 (2008~10年、2023年)

作：武本英之 補作：木村快

NPO 現代座メンバーであり、タクシー専門紙の記者をしていた武本英之の書いた作品。移動支援のNPOからの支援の申し出を断り続ける独居老人の芳子さんと、その周囲の人々の人間模様を描く。武本氏は2018年に亡くなり、その後2023年には追悼公演として再演を行った。



「ここは幸せゼロ番地」 (2010年、2011年)

作：武本英之

舞台は倒産寸前の郊外の小さなタクシー会社。先代社長の急逝で二代目となった息子の祐喜は、「これからはサービス精神が大事」と、ことごとく新しいやり方を持ち込み、「サービスは大事だが、タクシーは何より安全第一」と主張する古手ドライバーと対立する――。

主な上演作品

「蒼い空・友の呼ぶ声」 —— (2011~13年)

原作：木村快・江見俊太郎 脚本：木村快 音楽：福沢達郎
 特攻隊経験者である俳優・江見俊太郎さん（2002年没）のために、木村快により1997年に制作された「蒼い空」という作品があり、当時の構想のうちの1つのストーリーを脚本化し、2011年に『蒼い空・友の呼ぶ声』として上演した。かつて学徒兵として特攻隊を志願した太田は、戦友の形見の辞書を抱え、戦友の妹を訪ね歩く旅に出る――。



「出会うの街」 —— (2013年)

作：木村快 音楽：小川洋
 裏通りにある喫茶店「カフェ・出会う」を舞台に、近所の主婦やNPO活動家、タクシードライバーなど様々な人が集う中で生まれるドラマを描く。地域の人たちとの交流の中で背中を押されて実現した公演。作品内容もできるだけ地域の実情を取材し、この町が目指す姿を舞台上に表現した。

合唱構成劇「武蔵野の歌が聞こえる」 —— (2014~17年、2023~25年)

作・演出：木村快 音楽：福沢達郎
 徳川吉宗の時代に新田世話役に抜擢され武蔵野台地に82ヶ村の新田を誕生させた川崎平右衛門の歩みを、語りと芝居、歌を交えながら展開する。地元有志とともに地域史の取材をすることから始まった。2014年から2017年まで毎年上演を行い、NPO現代座として地域に根差した代表作となった。2023年以降は少人数編成での朗読とピアノの生演奏による形態での上演を行っている。



「ブリンギン・ホテルにて」 —— (2022年)

作：木村快 演出：八木澤賢
 1995年夏、千里はインドネシア奥地の病院でボランティア医師として働き帰国しながら父を訪ね、そこで初めて父の人生と向き合うことになる。父は、昭和18年に学徒動員令でインドネシアに従軍し、敗戦後は日本軍を脱走してインドネシア独立戦争に参加した過去を持っていた。「熱い風」の物語を下敷きに再構築した作品。

『北の海へ』

この詩は「出航」のシノプシスになっています

1. 灰色の空だよ北へ向かう船
またこの船にもどってきたよ
陸^{おか}で暮らすつもりでいたんだけど
いつも同じことのくりかえしなのさ

2. 魚はだんだんとれなくなるので
地道な暮らしをしるといわれた
いろいろ努力はしてみたんだよ
陸の暮らしだって甘くはなかったよ

※ 北の海に行ってまた働くよ
どうせ果てるなら
海で果てるよ

3. 長距離トラックにも乗ってはみたさ
トンネル工事でも働いてみたよ
景気の悪いのはどこでも同じさ
馴れない仕事は体にこたえたよ

4. 久し振りで故郷に寄ってはみたさ
おふくろはかわらずぐちばかりこぼし
親父はもうすっかりふけこんでたよ
妹はとっくに嫁に行ってたよ

※ くりかえし

5. 船を降りた時はわき目もふらずに
船に戻る日はしみじみ歩く
海岸通りの小さな売店で
マスコットにする人形を買ったよ

6. 出航準備で賑わう事務所は
いつもの笑顔がそろっていたよ
わかれの酒を飲んだこの甲板で
また肩たたいて酒を飲むさ

※ くりかえし

7. エンジンの音が体をふるわす
外洋にむかって港を出るとき
三号埠頭の倉庫の前で
飲み屋の女が笑って手をふった

8. 灰色の空だよ北へ向かう船
またこの船にもどってきたよ
陸で暮らすつもりでいたんだけど
いつも同じことのくりかえしなのさ

※ くりかえし

北の海へ 詩・木村快
曲・岡田京子

は いろいろのそら だよ き 北へ向かう 船 ね

ま ちこのおれ に - も びってきだよ -

お のせくらすつ もりで い たんだけれど

い つもおなじ ここの くりかえしなのさ

ま ちのうみに いて まち - はたらくよ びう

せ はてる作 ら うみさ - はてるよ



特定非営利活動法人 NPO現代座

環境・人権・共生の文化と取り組む演劇NPOです。人と人のつながりを通して、一緒に感じあい、考える文化活動をすすめます。

住所 〒184-0003 東京都小金井市緑町5-13-24 電話 042-381-5165 FAX 042-381-6987 メール info@gendaiza.org

会員募集

入会のお申し込みは随時受付をしております。
NPO現代座は、会員によって支えられています。
定期的に活動の状況、また活動によって得られた地域の文化状況をニュースレター（年4回）によってお伝えします。

下記の口座に郵便振替で年会費をお振込みください。

年会費 一般会員：3,000円

協賛会員：1口 10,000円（1口以上）

郵便振替：00110-7-703151 加入者名：NPO現代座

NPO現代座の最新情報はこちら

●ホームページ <https://www.gendaiza.org>



- X (旧Twitter) @NPO_Gendaiza
- Facebookページ NPO現代座サポーターズ
- Instagram @npogendaiza